

野山の花

— 身近な山野草の食効・薬効 —

城西大学薬学部 白瀧 義明 (SHIRATAKI Yoshiaki)

レンギョウ *Forsythia suspensa* (Thunb.) Vahl (モクセイ科 Oleaceae)

3月に入り、ようやく春めいてきた山里を歩いていると、民家の庭などで黄色の花を枝いっぱいにつけた灌木を見かけることがあります。これがレンギョウです。本植物は中国原産で、日本へは平安時代初期に渡来したとされ、庭などにも植えられる雌雄異株の落葉低木で、樹高は1~3m、繁殖力は旺盛でよく繁り、半つる性の枝は湾曲して下に垂れるようにして伸び、地面に接触すると、そこから根を出して新しい株ができます。枝は始め、竹のような節を持つのですが、枝の髓が早期に消失するため、節の部分を除いて中空になります。このことから“空の木”、レンギョウウツギ(連翹空木)という別名がつけました。この名は、本来の連翹(トモエソウ)との誤用に気付いた時期、両者を区別するのに使われたそうです。レンギョウの花は、まだ葉が芽吹く前の早春(3~4月頃)、2~3cmの黄色い4弁の花が、多数、細い枝に密に開き、花が咲き終わる頃、今度は入れ違うかのように、緑色の葉(長さ3~10cm、幅2~5cmの長卵型。葉先は鋭尖で、葉縁にまばらな鋸歯がある)が対生に芽吹き、葉は秋になると濃緑色、黄緑色、紫色と変色し、最後に落葉し、実った果実は生薬として用いられます。

「レンギョウ」として一般に植栽されているのは、レンギョウ、シナレンギョウ *Forsythia viridissima*, チョウセンレンギョウ *Forsythia viridissima* var. *koreana* の3種です。これらはよく似ていますが、幹を縦に切ると、レンギョウは芽の出る部分以外が中空、シナレンギョウは芽の出る部分を含み細かい梯子状の髓があり、チョウセンレンギョウは芽の出る部分以外に細かい梯子状の髓があり、葉縁全面に鋸歯があることや葉幅や花冠の裂片がそれぞれシナレンギョウより太いことなどで区別します。また、レンギョウ、チョウセンレンギョウの枝は弓なりに長く伸び下垂します



写真3 シナレンギョウ (花)



写真4 チョウセンレンギョウ (花)



写真1 レンギョウ (花、遠景)



写真2 レンギョウ (花)

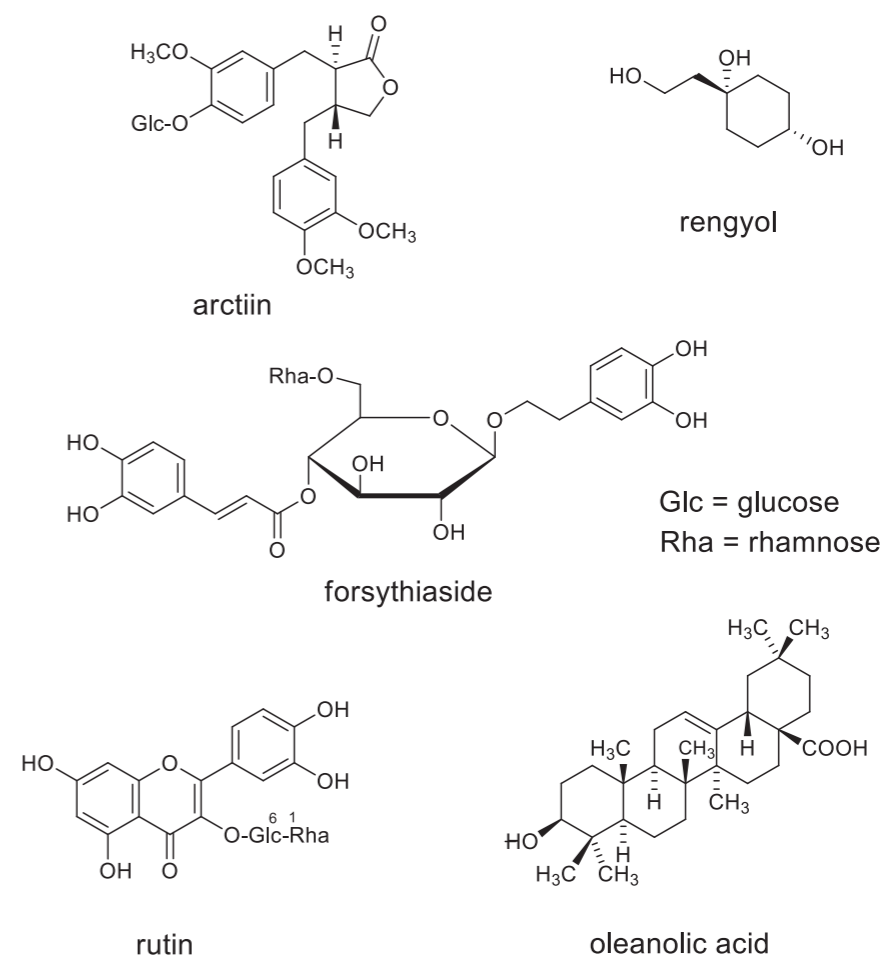


図1 成分の構造式

が、シナレンギョウは枝が直立し上向きに張って伸びる傾向があります。その他、日本固有種としてヤマトレンギョウ *Forsythia japonica* が中国地方の石灰岩地に分布し、ショウドシマレンギョウ *Forsythia togashii* が瀬戸内海の小豆島の石灰岩地に分布しています。これら日本原産種は、他のレンギョウ類に比べて開花時期が4～5月頃と遅くヤマトレンギョウは葉に先立って花を咲かせ、ショウドシマレンギョウは葉の展開と同時期に独特の緑色を帯びた黄色い花を咲かせます。成熟した果実に蒸気を通したのち、



写真5 生薬：レンギョウ（連翹）

天日で乾燥したものを生薬、レンギョウ（連翹, *Forsythiae Fructus*）といい、消炎、利尿、解毒、排膿作用があるとして荊芥連翹湯^{けいがいれんぎょうとう}、十味敗毒湯^{じゅうみはいどくとう}、防風通聖散^{ぼうふうつうしょうさん}、治頭瘡一方^{ぢづそういつぽう}、銀翹解毒散^{ぎんぎょうげどくさん}、響声破笛丸^{きょうせいはてきがん}、清上防風湯^{せいじょうぼうふうとう}などの漢方方剤に使われ、成分としてはトリテルペン（oleanolic acid）、シクロヘキシルエタン誘導体（rengyol）、リグナン配糖体（arctiin）、フェニルエタノド配糖体（forsythiaside）、フラボノール配糖体（rutin）等が報告されています。レンギョウの中国名は黄寿丹、英名はゴールデンベル golden bells, golden bell flower で、現在も「連翹」と書くと中国ではトモエソウもしくはオトギリソウを指します。また、レンギョウの季語は春であり、4月2日は彫刻家・詩人の高村光太郎（1883～1956）の命日で、これを連翹忌とも呼びます。これは、彼が生前好んだ花がレンギョウで告別式では棺の上にその一枝が置かれていたことに由来しています。